

それは銀河の夜明けだった。視界一杯に広がる宇宙の中に、俺は立っていた。足元にはラムネに朝の音色を詰め込んだ、音の欠片が落ちていく。それを両手で拾って耳へとそっと近づけ振れば、ころりころりと真夏の真昼の音がした。息を深く吸い込めば、無数の音楽が俺の素肌を透明にして、何もかもを鋭く燃やし、瞬きひとつも或るうつくしい星の塵にする。

名前のないその宇宙の音楽に、俺の両手はすべらかに銀河の白鍵を叩いた。幼い頃、初めてピアノに触れた時と同じ感覚だ。プラネタリウムで青く遠くで燃える星を見た時の、目には見えない宇宙を信じた、吸い込まれるような深い感動に似ている。この進行はなんだろう、今まで弾いたどの楽譜にも載っていなかった――。

少し冷たい、朝だった。俺は深い感動と興奮の余韻を耳の後ろに連れて、ぼんやりと瞼を開ける。

目が覚めてすぐに、あの感覚は夢だと気付いた。ベッドに横たわったまま首を動かして、ベッド脇にある小窓を見つめる。

初夏、まだ薄青い夏の輪郭が窓辺で小さく揺れていた。向かいの公園で眩く揺れる木々の緑、真昼の持つ透明な白、半ズボンにシャツ一枚で夏を追いかける小学生の喧騒。不思議なくらいに現実的な日常が、まるで永遠に流れて揺れて巻き戻るような、非現実的な色と速さで窓の外を流れている。

二週間前、稀代の天才ピアニストと呼ばれた俺は、右腕を失くした。事故だった。発表会を目前に控えたレッスンの帰り道、居眠り運転をしていた車に轢かれ、俺は右腕を永遠に失った。腕がない、ということは、俺を奇妙な世界に捻じ込んだ。物心つく前から毎日座っていたピアノの前に座り白鍵と黒鍵を交互に眺めれば、腕を失ってなお、頭の中を色づいた無数のメロディの輪郭が鮮やかに流れた。それは確かな質感をもって俺に音を鳴らせと囁いた。この曲のスタッカートは星屑の角度。次の小節は薄いグレーの混じった青。

天啓のような確信と感動を、いつも俺は持っていた。あとは、そのメロディに合わせてただ無心で鍵を叩くだけだ。この指先が三度触れば水のような音が流れて、やがてこの曲は春の雨になる――。

そして俺は、理想の旋律が流れてこない違和感で初めて、右側の音が鳴らないことに気づくのだ。

その絶望は、生命を失うことよりも深く、俺を絶望で凍ませた。音は夢に見るほど鮮やかなのに、それを表す腕がない。右腕を失ってからというもの、もうこれで何度目かわからないその感覚は、何度でも俺を役目を失ったガラクタのような気分させた。

俺にとって、ピアノは世界のすべてだった。ピアノに触れていれば、世界のどんなものも見ることができた。聴くことができた。まるで自分の心のように、音も匂いも風さえも、すべてを感じる事ができた。

だから、右腕を失った今、俺は世界の半分が欠け落ちてしまったような欠落の中にいる。

八月、開放した窓から蝉時雨が絶え間なく聞こえてくる。夏休みの今、壁に掛けられた高校の制服も意味をなさない。音が詰まっていた俺の部屋には、ほとんど座ったこともない勉強机と、ベッドと、そして大きな黒いグランドピアノしかない。俺はベッドの縁に座って、今はない右腕の先と、ピアノをただじっと眺めてい

た。果てのない喪失感に、ただ呆然としていた。

俺の家族は、幼い頃から俺のピアノの才を喜んだ。

俺に何か習い事をさせようと母親が選んだのが、たまたまピアノだった。レッスン初日、ピアノの教師はレッスンを終わるや否や、俺の母親に電話をかけたらしい。お宅の息子さんは、天才かもしれません――。

俺自身も、ピアノに触れたその瞬間、「見つけた」と思った。

感動したのだ。幼いながら、俺はきっとこのために生まれてきたのだと思った。

それからの毎日は、ピアノ漬けだった。両親は次々とコンクールで金賞を取る俺に、喜んで部屋を防音加工にしてくれたし、グラランドピアノまで買ってくれた。暇さえあればピアノを弾いた。いつからか、譜面を見なくても完璧に音が拾えるようになったし、その音がそこに置かれている意味もわかるようになった。

楽しかった。いつも仕事で忙しい両親は、俺のコンクールの時だけは見に来てくれることが多かった。俺の活躍を手放しに喜んでくれたし、俺自身も音の世界に浸っていられるのは幸せだったからだ。

そして、俺と、俺の家族以上にこの痛ましい喪失について嘆き悲しんだのは、幼馴染みの真波だった。

真波は隣の家に住んでいる、同い年の男だ。初めて真波と出会ったのは、小学校にあがった俺が、ピアノのレッスンから帰ってきた時だった。

ピアノのレッスンを終えて家に入ろうとした俺と、ちょうど同タイミングで反対側から真波が家に帰ってきたのだ。サッカーボールを小脇に抱えて、遊びから帰ってきた様子の真波は俺をじっと見つめてきたから、俺もつい見返ってしまった。

真波は初めて出会った時から、とてもうつろい顔をしていた。その上、一目見ただけでこいつは学校でも

みんなの人気者なのだろうと思わせるような、人を惹きつけるオーラを放っていた。

その品の良さそうな顔で、真波は俺を品定めするような目で見た。そして、真波は楽譜の少しはみだした靴を抱える俺に、おまえ、ピアノ弾けんの、と聞いたのだ。

正直に言って、俺は真波みたいな奴が苦手だった。昔から静かな場所が好きだったし、運動も大して得意ではなかった。ピアノは女のやることだと、足が速くて人気者のクラスのリーダーに学校でからかわれたこともあったから、真波のような存在には余計に忌避感をおぼえた。

なるべく会話を交わしたくなくて、うん、とだけ短く答えて家に入ろうとすれば、真波は間髪入れずに「聞かせてよ」と言ったのだ。馬鹿にされるのが関の山だと思っていたし、よもやそんなことを言われるとは思っていなかった俺は、またしてもドアノブから目を離して真波を見つめてしまった。そうすれば真波はなぜかそれを肯定と受け取ったらしく、「ありがと、悪いな」と言って凶々しくも俺のそばへと寄ってきたのだ。

その時俺は、一曲弾いてみせれば真波が満足して帰ってくれると思った。そしてもう二度と、俺に興味なんて抱かずに放っておいてくれることを願っていた。

だというのに、俺の部屋で、俺の一番のお気に入りを入れて弾き終えて鍵盤から顔を上げて仰ぎ見た真波は、恍惚とした表情で放心したように俺の指先が鍵盤から離れるのを見ていた。そして、俺が驚くより先に、真波の切れ長の瞳からつと、と涙が伝うのが見えた。それは次第に量を増して、ぼたぼたと床に落ちるまで増えて、俺は何が起きたのかと立ち上がりかけた。真波はその時自分の身に起こったことに初めて気づいたかのようにハッとして、それから両腕で涙をすごしとぬぐった。どうしたの、と俺が聞いた時、わからない、と言ってから真波は混乱したように涙を流し続けた。真波は次第に我を取り戻していったようで、ひとしきり泣いた後静か